シネマ女性学

10代が描くアフガンの今

松本 侑壬子・ジャーナリスト

この映画の原題は「仏陀は恥辱のために崩れ落ちた」。2001年3月、タリバンの手によりアフガニスタン中部バーミヤンの歴史的な仏像が破壊されたことを指すという。

監督のハナ・マフマルバフさんは、この映画を撮った時には17歳という若さ。だが、優れた映画には監督の年齢は関係ない。映画の狙い、問題の核心、映画で描かれた子どもらへの思いが清々しいまでに明確に画面から伝わってくる。折しも来日中の監督の言葉を添えて、今月の作品を紹介する。

この題名（原題）には監督の思いが込められている。「私の父（イラン映画界の巨匠モフセン・マフマルバフ監督）の言葉で、罪なき人々に起こるあまりに多くの残虐行為や暴力を目撃し、仏像はそれを恥じて自ら崩れ落ちた、という意味です。この題名があるからこそ、映画をバーミヤンで撮影したのです」。

翻訳された邦題には仏という言葉が含まれていないが、「日本人は（仏教国なのに）仏陀という言葉が嫌いなのかしら？」と少し寂しそう。自分は仏教国に生まれたかった、とか。

映画の内容は、バーミヤンの洞窟家屋に住む一家の6歳の少女バクタイは、隣家の幼なじみの男の子アッバスが「a, b, c」と読み書きの勉強をしているのが、羨ましくてたまらない。何とかして、自分も学校へ行きたいと奔走し、やっとノートを手に入れる。喜び勇んでアッバスの学校について行ってみると…。

「学校に行きたい」思いを決して諦めない健気で前向きでかわいい女の子を通して、今のアフガンの子どもの姿、教育のあり方、人々の生活、社会の状況など子どもを取り巻く状況がぐんぐん浮かび上がってくる。さんざん苦労して女の子の学校にたどり着いたバクタイだったが…。

劇中、バクタイが悪童らの戦争ごっこに巻き込まれ、タリバンの民衆抑圧さながらに生き埋め、石打ちの刑、ブルカ（ベール）被せと遊びとはいえ散々な目に遭わせられる。やっと頼りのアッバスに出会うが、彼は守ってもくれなければ、相手と戦いもしない。いじめられれば、頭を抱えてされるままだ。タリバン気取りの少年らはやりたい放題暴れまわる。アッバスがいじめられているバクタイに向かって叫ぶ「死んだふりをしろ。自由になりたいなら死ぬんだ！」との言葉が胸を突く。子どもの暴力の場面は、かつて仏陀像のあったまさにその場所で撮った。

「子どもの残虐な遊びにショックを受けたという大人に、アフガニスタンの厳しい現実を知らせねば。子どもの遊びは、大人の暴力行為の結果です」と。この国では1979年のソ連によるアフガン侵攻以来、足かけ23年間も戦争が続いてきた。同国の子どもや若者は、生まれて以来、戦争中の生活しか知らないのである。

「石の仏像ですら崩れるのに、生身の幼い子どもらに加えられる暴力（戦争）に対して、世界が何もしないとはどういうことか」と、訴えるハナ監督は、今年20歳になった。

『子供の情景』

イラン・仏映画（81分）／ハナ・マフマルバフ監督

4月18日より岩波ホールほか全国にて順次公開